

移民史継承のモデル構築を目指した広域 MLA 連携事業

令和 6 年度文化芸術振興費補助金（Innovate MUSEUM 事業）

日本版ジネオロジーの確立に向けた調査と情報共有

<報 告 書>

1. 先進事例調査（アイルランド・スコットランド）

2024 年 8 月 25 日～9 月 2 日

2. オンラインシンポジウム

2024 年 12 月 20 日

原 裕昭 （沖縄県立図書館）

金城 さつき（沖縄キリスト教学院大学）

東 悦子（和歌山大学）

和歌山移民研究を軸とした国際交流事業実行委員会

（主管：沖縄県立図書館）

目次

I. はじめに

1. 背景
2. 沖縄県、和歌山県における日系人のルーツ調査に関する現状
3. 本調査の目的
4. キーワード
5. 行程表

II. アイルランド ダブリンにおける調査

1. 基礎情報
2. ジネオロジー関連資料所蔵機関
3. 移民博物館およびルーツ調査機関
4. ジネオロジストへの聞き取り

III. スコットランド エディンバラにおける調査

1. 基礎情報
2. ジネオロジー関連資料所蔵機関
3. 博物館
4. ジネオロジストへの聞き取り

IV. まとめ

1. 調査の総括
2. 今後について

V. シンポジウムの開催

VI. 参考文献・謝辞

I. はじめに

1. 背景

世界的に移民の歴史を資源とする観光市場が拡大している。自分のルーツを探るため、あるいは先祖の故郷を訪れるために、海外及び国内を訪問することをルーツ・ツーリズム（Roots Tourism）と総称する向がある。

ルーツに関する関心は、1976 年におけるアレックス・ヘイリーの『ルーツ』の出版およびテレビドラマ化を皮切りに、1990 年代末以降、海外において家族史に関する資料を検索できるインターネットサービスや自身の人種・民族的ルーツを確認できる遺伝子検査サービスの普及を背景に、世界中で飛躍的に上昇し、特にアメリカではルーツ調査が 2 番目に人気がある趣味と報じられている。（喜多・山口（2008）, 河上（2023））

ルーツ調査では、古文書館、図書館、役所などで先祖の出生証明書、国勢調査、渡航記録などの記録を集め、家族史を紐解くことで、先祖とのつながりを感じ、アイデンティティの確認等に資するものである。また、ルーツ・ツーリズムとしての具体的な行動としては、親戚訪問・墓参りなど含め先祖と関わりのある場所・地域の訪問をはじめ、記録を閲覧するために古文書館、図書館等の訪問、その地域の歴史文化や生活も学ぶために博物館の見学、レストランなどで郷土料理の飲食などであり、訪問者自身の体験としてつながりを感じることが特徴である。

ルーツ調査、ルーツ・ツーリズムの先進事例としては、アイルランドやスコットランドをはじめとするヨーロッパ諸国があげられる。それらの国々では、海外、特に北米にいる移民子弟をターゲットとした観光市場が重要な収入源となっており、2000 年以降、ルーツ・ツーリズムを促進するマーケティングやキャンペーンが国をあげて行われてきた。特に、ルーツの地を訪れるインバウンド観光では、通常の観光コースとは異なるへき地などを訪問することもあり、一般的な海外旅行客と比較しても大きな経済効果が得られるといわれている。

一方、日本においては、戦前・戦後に北米・南米等へ移民した日本人の子孫（以後「日系人」という）が、日本に高い関心を示している。しかしながら、言語の壁や行政・社会システムなどの相違により、先祖のルーツに関する記録・情報にアクセスすることは難しい状況である。また、日系人がルーツ調査、ルーツ・ツーリズムとして先祖にゆかりのある場所などを訪問する際、通訳・移動手段などのロジスティクスや親戚・公民館などとの関係、個人情報への配慮など様々な検討課題があり、画一的な方法論が整理されていない状況である。

さらに、JICA 横浜 海外移住資料館や国立国会図書館をはじめ、移民関係資料を取り扱う博物館、図書館、文書館、大学・研究機関、企業等が存在するが、日系人の情報ニーズに対応する体制が整っていないと言わざるを得ない。

2. 沖縄県、和歌山県における日系人のルーツ調査に関する現状

沖縄県は、1990 年から凡そ 5 年に 1 度と海外沖縄県系人が集う「世界のウチナーンチュ大会」を開催し、海外県系人との交流に努めている。また、県・市町村・JICA 等による海外県系子弟の沖縄研修制度、海外県系コミュニティへの芸能等指導者派遣、県史・市町村史編さんや県内研究者による海外調査、移民歴史教育普及プログラム等を通して、継続的な連携・交流を行ってきた。

さらに、沖縄県立図書館は 2016 年の「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」から海外沖縄県系人の出身地等ルーツを調査する Finding Okinawan Roots Project!を実施し、海外県系人個人からルーツ調査の依頼を受け付け、今までに 2000 件以上の調査依頼を受け付けている。しかしながら、図書館の資料調査を超えた訪問者の情報ニーズ、ルーツ・ツーリズムにおける通訳・移動手段などのロジスティクスに関する旅行会社等との連携、親戚・公民館などとの連携、個人情報への配慮など様々な検討課題がある。

和歌山県の現況としては、北米や中南米諸国などに、移民の歴史を背景とし、和歌山にルーツを持つ人々を中心とした 11 の県人会が組織されている。他方、和歌山県内には、移民や移住に関して、公益財団法人や複数の民間団体が、青少年の受け入れや海外県人会の周年記念への参加などを通して交流を行っている。さらに和歌山県が主催した「第 1 回 和歌山県人会世界大会(2019)」および「第 2 回和歌山県人会世界大会 (2023)」の開催によって、海外県人会等から第 1 回は 280 名、第 2 回は 412 名の参加者が和歌山に集う機会となった。

先祖探しに関しては、沖縄県のように公的機関による窓口は設置されていないが、海外へ移住した祖先を持つ人々―海外在住者および日本の在住者の両方の子孫を含む縁者―から、和歌山県庁をはじめ和歌山県内において移民母村と称された自治体に存する歴史資料室やミュージアム、筆者が所属する大学の研究所や筆者自身にも先祖探しの問い合わせが入っており、それぞれの機関・団体に所属する人々が適宜対応しているのが現状である。

3. 本調査の目的

ルーツ調査、ルーツ・ツーリズムの先進事例であるアイルランド及びスコットランドにおいて、ジネオロジー関係機関である博物館 (M:Museum)、図書館 (L:Library)、文書館 (A:Archives)、大学 (U:University)、ジネオロジスト (Genealogist:系図学者)、ジネオロジー相談機関、旅行会社 (Tourism Industry) 等の取り組みを調査することにより、それぞれの機能や役割を整理する。また、日本においてジネオロジー (ルーツ調査) 及びルーツ・ツーリズムの確立・促進を図る上での課題の抽出、関係機関の連携・役割などについて考察する。

4. キーワード

本調査のキーワードである「ジネオロジー(genealogy)」は「系図学」と翻訳される。山口(2017)によると、それは先祖について調べ、その情報を整理する作業で、先祖調査や家族史(family history)とも呼ばれるものである。

本調査においても、「genealogy (genealogical) research」「family history」「ルーツ調査」など機関によって違う名称が用いられているが、断りがない限り、同義で捉える。

また、先祖について調査する専門家を「ジネオロジスト (genealogist)」と呼んでいる。仕事として調査を請け負うプロフェッショナルと趣味で行っているボランティアがいる。

祖先の生誕地を訪れるなど自らのルーツを訪ねる旅を「ジネオロジー・ツアー/ルーツ・ツアー(genealogy tour / root tour)」という。

5. 行程表

期間：2024（令和6）年8月25日～9月2日

訪問都市：ダブリン（アイルランド）、エディンバラ（イギリス）

日時		スケジュール		用務	宿泊
8月25日	日		那覇空港発 関西国際空港着 関西国際空港発 ドバイ空港着	移動	機内泊
8月26日	月	AM	ドバイ空港発 ダブリン空港着	移動	
		PM	EPIC The Irish Emigration Museum 調査 Irish FamilySearch Center	移民博物館の展示ツアー調査、ジネオロジー（ルーツ調査）相談窓口の調査	ダブリン泊
8月27日	火	AM	Genealogy Tour & Genealogist Interview（A氏）	ジネオロジーツアー実態調査	
		PM	Genealogist Interview(B氏)	ジネオロジーツアー実態調査	ダブリン泊
8月28日	水	AM	National Library of Ireland調査	ジネオロジー関連図書館調査（広域）	
		PM	National Archives of Ireland調査	ジネオロジー関連アーカイブ調査（広域）	ダブリン泊
8月29日	木	AM	ダブリン空港 エディンバラ空港 Scottish Council on Archives調査	ジネオロジーアーカイブ中核施設調査	
		PM	National Library of Scotland調査 Genealogy Short Tour & Genealogist Interview（C氏）	ジネオロジーアーカイブ調査（広域） Genealogist Interview & Tour	エディンバラ泊
8月30日	金	AM	National Records of Scotland調査	ジネオロジー関連図書館調査（広域）	
		PM	Genealogy Tour & Genealogist Interview（D氏）	ジネオロジーツアー実態調査	エディンバラ泊
8月31日	土	AM	Edinbutgh City Library調査	ジネオロジー関連アーカイブ調査（広域）	
		PM	National Museum of Scotland調査	移民博物館展示調査	エディンバラ泊
9月1日	日	AM	ホテル→空港	移動	
		PM	エディンバラ空港発 ドバイ空港着	移動	機中泊
9月2日	月	AM	ドバイ空港発 QR802	移動	
		PM	関西国際空港着 関西国際空港発 那覇空港着	移動	

II. アイルランド ダブリン(Dublin) における調査

1. 基礎情報

アイルランドは、北西ヨーロッパに位置し、アイルランド島の大部分を占める。1801 年～1922 年までアイルランドはグレートブリテン及びアイルランド連合共和国に属していた。1845 年～1849 年の間、アイルランドの人々のほぼ唯一の食料となっていたじゃがいもが、疫病菌の侵入によって壊滅状態に陥り、じゃがいも飢饉に繋がった。約 100 万人が餓死し、また、1840 年代にアイルランドを脱出し、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアへ移民した人々の数は 100 万人とも 120 万人とも言われている。飢饉による死亡と移民の数で、アイルランドの人口は 1841 年の 820 万人から 1901 年には 450 万人へと減少したと推定されている。

アイルランドの人々が最も多く移民したのがアメリカであり、3000 万人以上のアイルランド系アメリカ人がいる。

2. ジネオロジー関連資料所蔵機関

(1) National Library of Ireland (NLI) : アイルランド国立図書館

URL <https://www.nli.ie/family-history>

a) 概要

アイルランド国立図書館は、1877 年に設立された。アイルランド国立図書館の使命は、「アイルランドの歴史の文書や知的な記録の収集、保存、促進そしてそれらを手・利用しやすくすること、また、記録された知識の世界をより広げるようなアクセスを提供できるよう貢献すること」である。参考図書館であり、貸し出しは行っていない。アイルランドで出版されたものや、アイルランドに関係する資料を収集し、本、地図、手稿、音楽、新聞、雑誌そして写真などを含んでいる。

b) ジネオロジーサービス・資料

ジネオロジーサービスは Family History Service と呼称し、二人の専門の図書館司書が担当している。直接来館、Email、電話でレファレンスサービスを実施しているが、あくまでも自分で調査するためのガイドをするだけで、利用者の代わりに調査することはない。利用者が自分で調査ができない場合は、利用者がジネオロジストに有償で契約することになる。(ジネオロジストのリストはウェブサイトに掲載)

過去には、ジネオロジストがレファレンスサービスを行っていたが、現在は図書館職員のみが原則行っている。(夏は利用者が増えるのでジネオロジストと契約して配置している)。ルーツ調査入門者向けに Family History Worksheets (Getting Started) 配布し、レファレンスサービスを利用する前に記入してもらい、質問の内容を絞り、よりの確かなアドバイスができるようにしている。Family History Service の利用者は、アイルランド国内 50%・海外 50%である。海外からは、イギリス・アメリカ・オーストラリアの順に利用が多い。

Family History Service 専用のスペース（部屋）があり、調査席、参考図書及びレファレンスカウンターに加えて、ジネオロジー関係や新聞記事検索等有料データベースが無料で自由に利用できるパソコン（10 台）を設置している。

ジネオロジー関係の所蔵資料としては、1950 年代、60 年代にアイルランド国立図書館が収集した教会資料のマイクロフィルムがあり、現在はオンラインにデジタル公開している。これにより、来館者数は減少したが、オンライン利用が急増した。また、ウェブサイトのアクセシビリティを向上するため、他の欧州の国立図書館などを参考に近年大きなリニューアルを実施した。その際、より利用者に身近に感じてもらうよう Genealogy Service から Family History Service に名称を変更した。

ウェブサイトをはじめ、アイルランド国立図書館の Family History Service は、ジネオロジー調査を行う上でのポータルサイト的な役割を果たしており、自館に所蔵がない資料についても、資料解説や他の関連サイトのリンクが充実している。

(2) National Archive of Ireland (NAI) : アイルランド国立公文書館

URL <https://genealogy.nationalarchives.ie/>

a) 概要

アイルランド国立公文書館は、1988 年 6 月 1 日に、国務文書局 (SPO) とアイルランド公文書館 (PROI) が合併して設立された。SPO は、1702 年にさまざまなアイルランド総督（英国君主のアイルランドにおける代表）の行政に関する記録を保管する場所として設立された。PROI は、1867 年のアイルランド公文書法に基づいて、20 年以上前の行政、裁判、遺言検認の記録を取得するために設立された。しかし、その資料保管施設は 1922 年 6 月の内戦時に火災で焼失した。その中には 13 世紀に遡る記録も含まれていましたが、ほとんどの記録が失われた。

b) ジネオロジーサービス・資料

無料のジネオロジー・リサーチ・アドバイスサービスを提供している。対面と Email で問い合わせに応じている。調査の代行するのではなく、調査のアドバイスを行うのみである。予約は不要で先着順である。Email には、5～10 日程度で回答している。このサービスは、アイルランド国立公文書館が Accredited Genealogists Ireland (AGI) に委託しており、AGI に認証したプロフェッショナルジネオロジストによって行われている。2023 年は、1,230 件の利用があった。

アイルランド国立公文書館は、ウェブサイトの充実も図っている。入[門者向けのジネオロジー調査ガイドブック](#)をオンラインで公開し、FAQ も充実している。

ジネオロジー資料としては、出生・死亡等の民事記録、国勢調査等の主要資料を所蔵し、デジタル公開している。名前・場所・年代などで容易に検索できるようになっている。さらに、[アイルランド政府が運営しているジネオロジー関係ポータルサイト](#)

ともリンクし、そこから検索も可能となっている。

(3) Registry of Deeds, Ireland

土地の売買・賃貸借に関する証書を保存している。1708 年から現在までの 5,000,000 件のメモリアル（売買記録の要約）が 17,000 冊の本にまとめられている。1833 年から現在までの記録は 20 ポンド（約 4000 円）支払えば、スタッフが調査してくれるサービスがある。この記録には、18 世紀、19 世紀の土地の所有者が中心となるが、氏名、職業、妻の旧姓、兄弟など、さまざまな先祖の情報を得ることができる可能性がある。

羊の皮からできた紙に寄留されており、300 年以上前の記録でも鮮明に文字を記されている。

3. 移民博物館およびルーツ調査機関

(1) [EPIC アイルランド移民博物館](https://epicchq.com)

URL <https://epicchq.com>

コカコーラ最高経営責任者を務めた Neville Isdell（ネビル・イスデル）が開設した博物館。自分自身も 10 歳の時にアイルランドから移民として現在のザンビアへ渡った。博物館は 2013 年に購入した建物で、鉄製の耐火上部構造にタバコ、お茶などの保税品を保管していた。20 のコーナー（ブース）に分けてアイルランドからの移民の始まりとその背景、海外（アメリカ、カナダ、アルゼンチン、オーストラリアなど）アイルランド人の活躍をスポーツ、政治、文化と主に 3 つの分野に分けて紹介されている。アイルランド人がいかに世界に影響を与えたか、また移民を送り出しただけでなく、移民を受け入れていることから、多様なアイルランド人ということで締めくくられている。

展示方法としては、デジタル技術を駆使したものとなっており、ビデオ映像、モーションセンサーでクイズやダンスを楽しみ、100 年前の音声をデジタルリマスターし聞くことができるようになっており、来場者が楽しめるような展示方法も特徴的である。来場者の 8 割はアメリカ人、その他はオーストラリア、カナダなど。国内の子どもたちの来場もあるが、多くは観光客であるという。来館者数は多い時は 2000 名、少ない時は 200 名と差がある。

(2) [Irish FamilySearch Center](https://www.irishfamilyhistorycentre.com/irish-lives-remembered/) : アイルランド家族史センター

URL : <https://www.irishfamilyhistorycentre.com/irish-lives-remembered/>

EPIC アイルランド移民博物館に併設されているセンター。アイルランドに繋がりある

人々の家族情報を探す場所として利用されている。常時2〜3名のスタッフがおり、全体で8〜10名のスタッフで運営している。情報を検索するための資料はセンター内にあるのではなく、国立図書館などの情報を利用している。調査については、調査時間や内容によって料金が異なる。

基本的にウェブサイトより事前申請、予約が必要となる。Web サイト上には、自分自身で家族の歴史が調べられるようなワークシートも提供されていて、自由にダウンロードできる。

(3) Accredited Genealogist Ireland (AGI) アイルランド公認系図学者

アイルランドの専門系図学者の認定および代表機関である。1986年に設立され、前身のAPGIとして活動が開始される。メンバーへの入会は、評価委員会の推薦に基づいている。AGIは、主にアイルランドの情報源で調査研究を行い、系図調査以外のフルタイムの仕事に従事しておらず、アイルランド国内に拠点を置くプロの系図学者に開かれている。

2016年から、スコットランドのカウンターパートであるASGRA (The Association of Scottish Genealogist & Researchers in Archives スコットランド系図学者及びアーカイブ研究者協会) と連携している。また、AGIは、Council of Irish Genealogical Organizations(アイルランド系図組織評議会)とFederation of Local History Societies(地域歴史協会連盟)の構成メンバーである。

アイルランドのFamily History(家族史)を調べる際に、有料・無料のリソース情報を共有し、海外の関係機関からも情報を得ることもある。様々なオンライン検索サイトのほか、リポジトリ(データベース)やアーカイブにて情報を収集するため、その情報を共有している。

AGIメンバーとして登録するには、2年程度のアイルランドの系図学に関する講座を受講する必要がある(Certification)。その後もCPD(Continuing Professional Development)でスキルを継続していく必要がある。アイルランド系図調査が最新の状態に保たれ、高い基準を維持し続けることを保証するために、毎年少なくとも4回のCPDイベント(学習会)を開催している。

URL : <https://accreditedgenealogists.ie>

4. ジネオロジストへの聞き取り

聞き取り調査にあたり、ジネオロジストへの質問リストを作成した。主な質問は次の9点であったが、ダブリンおよびエディンバラの両地とともに、協力者との対話の流れによって、原、金城、東が適宜自由に質問をし、座談会形式で進行した。

1. どのようにして、どこでGenealogistの資格を得ることができますか。

- 2 Genealogist は皆、協会に所属して活動をしているのですか。
- 3 Genealogist は、自治体などの公的な機関、博物館、図書館、旅行会社などと連携を図っていますか。
- 4 Genealogist は、Genealogist tour を計画したり、ガイドしたりしますか。
- 5 どのような形で（経由して）仕事を受けますか。
- 6 依頼者は、どこの国籍が多いですか。
- 7 文書記録のほかに、親戚を探したりもしますか。
- 8 調査の過程で、依頼者や関係者とトラブルになったことはありますか。
- 9 仕事のやりがいとはどんなところですか。

以下にジネオロジストから聞き取った内容をまとめる。

(1) 協力者 A 氏

ジネオロジスト A 氏は、長年英語教師を務めた方で、日本人への指導経験もあり、日本人である私たちと会い、当時のことを懐かしそうに語ってくれた。

A 氏は、今回のツアーの一環で、Ireland's National Cemetery である Glasnevin 墓地へ案内してくれ、その敷地内のカフェで聞き取りに応じてくれた。

A 氏は、AGI (旧 MAGI)協会に属しているジネオロジストで、同協会はジネオロジストの資格を認定している。

先祖調査の依頼の受け方について、依頼者自身が、協会の HP に掲載されているメンバーの紹介を参考にして、ジネオロジストを選び、HP に掲載されている個人宛のメールで依頼したいジネオロジストに連絡をいれる。アメリカからの依頼者が多いそうだ。

仕事の内容は、文書記録から祖先に関するレポートを作成して情報を提供することであり、親戚を探すといったことは行わないそうである。

他機関との連携という点では、調査のために、自治体などの公的な機関、博物館、図書館などのデータベースにアクセスする必要があり、日頃から連携を図っているようである。私たちの訪問時も、調査に役立つ他機関へと案内してくれ、説明を受けられるように関係者を手配しておいてくれた。そういった点からも、さまざまな機関と良好な関係性を築いている様子がうかがえた。

ジネオロジストの仕事に関して、先祖の故郷などをめぐるツアーを計画したり、ガイドしたりすることはないそうである。

プロフェッショナルとボランティアの違いについては、プロは協会に属しており、プロへの依頼には費用がかかる。他方、ボランティアは趣味で（無償で）先祖捜しを手伝う人であるという。

これまでの調査において、依頼者や関係者とトラブルになったことはなく、仕事のやりがいは、他者の役に立てることである。

(2) 協力者 B 氏

B 氏は、AGI(旧 MAGI)のメンバーで、1987 年よりジネオロジストとして従事している。*GREENTIALS FOR GENEALOGISATS PROOF OF THE PROFESSIONL* の著者でもある。

B 氏も仕事の依頼の受け方は、A 氏と同様に、協会を通して連絡先を入手した方から直接依頼を受けるという。調査自体は、だいたい 3～5 時間を要し、1 時間 90 ユーロで仕事を引き受けていている。調査の結果はレポートにまとめて報告する。

ジネオロジストの仕事に関して、ジネオロジー・ツアーを計画したり、ガイドしたりするかという問いに対して、ツアーガイドではないので、そういったことは行わないとのことであった。

自治体などの公的な機関、博物館、図書館、旅行会社などとの連携に関連して、International partner として、UK や US と、特定のプロジェクト (specific project) を通してコラボレーションしたことがある。また、AGI とは、契約 (legal contract) を結んでいるとのことである。非公式 (informal) には、事例に応じて連携を図っている。

最後にプロフェッショナルとボランティアの違いは。A 氏同様に、プロへの依頼は費用がかかるという点が違いである。ジネオロジストは年齢の高い方が多いが、氏によると、若い世代が仕事とするのには、収入の面で難しいとのことである。

(3) 補足

ジネオロジストが、ジネオロジー・ツアーを企画・同行することはないと聞き、ダブリン市の観光案内所を訪れ、ジネオロジー・ツアーを行っているか尋ねてみたが、提供しているのは一般的な観光ツアーのみであった。立ち寄った際の窓口担当者は、ジネオロジー・ツアーという名称を知らなかった。ルーツ・ツアーと言い換えて説明を補足したが、行っていないとのことであった。

Ⅲ. スコットランド エディンバラ(Edinburgh)における調査

1. 基礎情報

スコットランドは、英国（グレートブリテン及び北アイルランド連合共和国）の北部に位置しており、独自の民族や文化、歴史がある。1707 年にイングランド王国とスコットランドが一つになりグレートブリテンとなった。

他のヨーロッパの人たちと同じように、スコットランド人も貿易と生産活動の機会を求めている。自国の社会的、経済的圧力もあったが、産業界における雇用水準は高かったものの、生計を立て、まともな生活を維持することはしばしば困難であり、新大陸に貿易と生産的入植の機会を見出した。

すべての移民が自発的に移住したわけではなかったが、18世紀からスコットランドの移民が始まる。移住協会や政府の斡旋業者が、移住先や渡航先を手配した。スコットランドの人口は1755年の1,265,380人から1901年には4,472,103人に増加し、成熟した工業経済となったが、同時期にはヨーロッパでも有数の移民数を記録した。19世紀には、より多くの人が旅費と移住費用を賄えるようになり移民数が増加した。カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカ等へ渡っている。現在、国内に住むスコットランド人よりも、海外にいるスコットランドルーツの人々が多く存在すると言われており、ルーツ・ツーリズムにも取り組まれている。

2. ジネオロジー関連資料所蔵機関

(1) [National Library of Scotland : スコットランド国立図書館](#)

a) 概要

National Library of Scotland (NLS) は、ヨーロッパを代表する国立図書館のひとつとして、スコットランドの豊かな文化生活に人々が参加できる機会を創出し、またスコットランドの遺産を守ることに尽力しています何世紀にもわたって、書籍や原稿から映画、音楽、地図まで、3,000万点以上の品々を所蔵している。スコットランドの物語を生き生きと伝え、誰もがアクセスできるようにするために努めている。

b) ジネオロジーサービス・資料

スコットランド国立図書館ホームページ内の「Family History」から主に情報提供・資料紹介等を行っている。NLS トップページから「Family History」ページに飛ぶリンクがあり、サービスの重要性和利用者の関心の高さが伺える。

「Family History」ページに内では、「An introduction to Scottish family history」「Starting your family history research」「Frequently asked questions about family history」など初心者向けのガイダンスが充実している。

さらに「Births, deaths and marriages」「Census records」など主要な記録についての説明、アクセス方法などの説明が丁寧に書かれている。これらの資料は、後述する National Records of Scotland が所蔵し、そのサイトである「Scotland's People」

で検索が可能である。が主に取り扱っている。

さらに「Historical clubs and societies」「Directories」「Emigration and passenger lists」「Surnames」「Gravestones」など Family History に関連する事項について、所蔵資料（出版された図書等）と関連事項についてそれぞれ紹介している。また、伝記、旅行記、写真、映像、地図、絵画、手紙、日記、旅券なども収集している。

レファレンスについては、Family History 専門ではなく、Reading Room（閲覧室）のレファレンスと同様に受け付けており、必要に応じて関連機関の紹介なども行っている。

スコットランド国立図書館は、アイルランド国立図書館と同様にジネオロジー調査を行う上でのポータルサイトのような役割を果たしており、自館に所蔵がない資料についても、資料解説や他の関連サイトのリンクが充実している。

URL <https://www.nls.uk/>

(2) [National Records of Scotland](#) スコットランド国立文書館

a) 概要

スコットランド国立公文書館（NRS）は、スコットランドの住民登録、国勢調査、人口統計、家族の歴史、国立公文書館および歴史記録を担当している。NRS は、2011 年にスコットランド総記録局とスコットランド国立公文書館が合併して設立された。

スコットランド政府によって作成された記録のほか、企業、土地所有者、家族、裁判所、教会、その他の法人によって作成された個人記録も保管している。デジタル化した資料は、[Scotland's People](#) で閲覧が可能となっている。スコットランドはアイルランドと比較しても、デジタル公開が進んでおり、また個人情報に関する考え方が大きく異なっている。そのため、現在も生存している人物の出生・婚姻・離婚等の記録もこのサイトは Email を登録するだけでどこからでも閲覧検索可能である。

b) ジネオロジーサービス・資料

様々資料について、Research Guides を紙とオンラインで提供している。特に、Genealogy 関係で利用が多いと思われる項目は「Researching People」「Researching Places」「Time in Care Records」などの項目毎にも整理され、利用者が検索しやすいようにデザインされている。例えば、「Researching People」では、「Guides on key records on life events and residency」として、出生／死亡・婚姻記録、センサス記録などがあり、それぞれの記録に詳細な説明が書かれており、

検索・閲覧方法も記載されている。Family History という項目もあり、主要な資料の Research Guides を再構成して、紹介している。また、紙のパンフレットとしても、主な資料について Research Guides を配布している。

NRS のジネオロジー資料は、下記のカテゴリで整理されている。

政府/法定登録簿/裁判所/教会//国有化された産業と交通/地方自治体/民間団体および法人団体/地図と計画などで、ほとんどがオンラインで検索・閲覧可能である。

(3) [The Scottish Council on Archives \(SCA\) スコットランド・アーカイブ協議会](#)

a) 概要

The Scottish Council on Archives (SCA) はスコットランドにある 37 のコミュニティアーカイブや資料保管施設などを総括し、資料の利用、保管などのワークショップや講座などを開催や共同プロジェクトを実施している。

また、SCA は、品質改善、認定、保管スケジュール、保存、著作権、デジタルアーカイブなどの問題をカバーするさまざまなリソースとツールの開発と提供を通じて、専門家の作業をサポートしている。また、新しいコミュニティ アーカイブプログラムを通じて、地域のアーカイブを維持または開始したいボランティアグループを支援している。

b) ジネオロジーサービス

コミュニティアーカイブは、人々、場所、歴史、国家の記録された記憶であり、私たちが過去と結びつけ、アイデンティティの感覚を与えてくれる。ルーツを調べる利用者 (Family Historian) は、アーカイブの主な利用形態の一つであり、SCA は利用者がスコットランド各地のアーカイブを訪れ、オリジナルの資料を閲覧するように Web 上で情報提供している。

例えば、コミュニティアーカイブの場所や連絡先、訪問する際のアポイントメントの取り方、Ancestral Tourism のイメージ動画などを発信している。また、スコットランドの家族史の調査方法、主な資料の解説と所蔵先等についても紹介している。

(4) [The Edinburgh Central Library \(ECL\) エジンバラ中央図書館](#)

a) 概要

ECL は 1890 年に開館し、市内初の公共図書館でした。図書館は、貸出、参考図書、音楽、アート & デザイン、地域資料 (エジンバラとスコットランド)、児童 6 つのジャンルに分かれた資料コーナーで構成されている。

音楽のコーナーでは、クラシックから現代音楽までの CD やレコード、楽譜などの資料が充実しているほか、さまざまな楽器の貸出し、練習室も利用が可能である。

館内での音楽会も開かれる。

b) ジネオロジーサービス

Family History に関連する資料は、地域資料（エディンバラとスコットランド）
に関連である。図書やエディンバラ地域の公文書、納税記録などがマイクロフィルム
で

閲覧が可能である。しかし、マイクロフィルムなどは、National Records of
Scotland でデジタル化され、検索も可能となっている。

The City of Edinburgh Council が提供するデジタルアーカイブサイトで過去の展
示や主要な所蔵品の紹介をしている。また、[Our Town Stories- Edinburgh](https://www.ourtownstories.co.uk/) という
サイトで所蔵するエディンバラに関係する古写真、地図、絵画等などから街の歴史、
場所、人物、人びとの暮らしなどについて、現在の地図と重ね合わせて閲覧するこ
とができる。

<https://www.capitalcollections.org.uk/>

<https://www.ourtownstories.co.uk/>

3. 博物館およびルーツ調査機関

(1) [Scottish People Center : スコティッシュ ピープル センター](#)

家族史を調べるためのセンターで、National Records of Scotland 内にあり、
Genealogist や家族史を調べている人たちなどに資料提供やサービスを行っている。国
の記録は1855年から開始されているため、それ以前については、教会の記録を参考に
調べることができるようになっている。スコットランドの出生、死亡、結婚、国勢調
査、カトリック教区の記録、紋章、遺言書などへウェブサイト ([Scotland's People](#))
を通して提供し、誰でもアクセスすることができる。

レジスターハウス内にある Scotland People Center の検索ルームは月曜から金曜の 9
時～16 時半までとなっている。※2024 年 9 月 20 日から開館時間が変更し、冬季期間
は月曜～金曜の 9 時～16 時までとなっている。

予約制で、センター内の PC で検索できるが、不明の場合は、スタッフに質問し、
検索方法を教えてもらうこともできる。また、直近 100 年については、証書のコピー
は外部から行うことができず、申請し承認されてから写しをもらうことができる。

利用料は、1 日 15 ポンドで検索件数・閲覧件数に制限はない。一方、ウェブサイト
Scotland's People では検索結果を閲覧する際に、書類の画像は 1 枚につき 1.5 ポンド
費用がかかる。

(2) National Museum of Scotland スコットランド国立博物館

スコットランドの歴史に関するコーナーで、5 階「Industry & Empire 産業と帝国」

のコーナー及び6階「Scotland ; Changing Nation 移り変わる国家」に移民に関する展示コーナーがある。5 階は短い映像とともに、なぜ移民することになったか、どこに移民したのかを国ごとに紹介されている。6 階はスコットランドを去った理由の展示に加え、移民した方々の子孫のインタビュー動画も合わせて聞くことができる。移民したスコットランドの人々がどのように世界へ影響を与えたのかなども紹介されている。イギリス国内の移動のほか、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、東南アジアやインド、南アフリカなどに渡って行ったことがわかるが、各地の資源を貿易で扱っていたこと、植民地政策と関連していたことも説明されている。

4. ジネオロジストへの聞き取り

ダブリン同様に聞き取り調査にあたり、いずれのジネオロジストにも共通して尋ねるべき質問を準備しておいたが、協力者との対話の流れによって、適宜、原、金城、東が質問を差し挟んだ。聞き取りは座談会形式で進行した。ツアーの過程において、歴史史跡などについて説明をうけた。聞き取りの結果は、概ねダブリンのジネオロジストの回答と同様の内容であった。

(1) 協力者 C 氏

8月29日、National Library of Scotland のカフェで聞き取りを行った。

C氏は、ASGRA 協会の会員で、ジネオロジストの資格取得に関連して大学の1コースを履修している。

調査内容に関しては先祖調査のみで、先述のジネオロジストらと同様に、ツアーガイドではないので、ツアーを計画したりガイドをしたりはしない。

調査の受け方については、協会のホームページを通して連絡先を入手した個人からメールで依頼がある。

仕事では文書記録を調査することだけでなく、親戚を探すこともあるかという問いに、それはしないとの回答であった。

仕事のやりがいに関しては、人の助けになることである。

ツアーでは、エディンバラの歴史史跡について説明をうける。ジネオロジストは、単に記録文書を読めるというスキルがあるだけでなく、歴史的背景他、広範な知識を有したうえで、記録を読み解いていることがうかがわれた。

(2) 協力者 D 氏

8月30日、Heart of Midlothian F.C. and World War 1 の記念塔近くのレストランで聞き取りをおこなった。

D氏は退職後にジネオロジストになる。2009年試験に合格し、Genealogy Association (ASGRA)のメンバーになる。C氏の語りから古い言語の知識を有する点がうかがえた。

仕事に関して、8時間程を調査に費やし、その結果をレポートで報告している。レポ

ートの分量は8ページ程度である。これまでの調査において、依頼者からの聞き取りを手がかりに現地へ行き、縁者について情報を得たこともあるそうだ。依頼者については、スコットランド人のクライアントが多い。

ツアーでは Heart of Midlothian F.C. and World War 1 の記念塔などへ案内してもらったが、C 氏同様に地域の歴史に関する広範な知識がうかがえた。

IV. まとめ

1. 調査の総括

(1) 図書館、公文書について

アイルランド、スコットランドにおいて、主要なルーツ調査資料となる出生・死亡・婚姻などの民事記録や国勢調査などは、国立公文書館が所蔵しており、情報公開が進んでいた。両国において、それらの資料をデジタル化され、誰でも検索し閲覧できるプラットフォームを政府が推進していた。また、国立図書館では、自館所蔵資料はもとより、上記の主要な資料をはじめ、他機関が所蔵しているルーツ調査に関連する資料の解説やリンクを提供し、幅広いルーツ調査資料のポータルサイトのような役割を果たしていることが分かった。さらに、調査入門者のため、調査ガイド、家系図サンプルの提供など実施していた。

アイルランドでは、公文書館・図書館双方が自館資料の特徴を生かしながら、コンサルタントサービスを積極的に行い、利用者のルーツ調査を支援に積極的に取り組んでいた。スコットランドでは、国立文書館が提供しているウェブサービスが非常に充実しており、専用の調査センターを設け、コンサルタントサービスも充実していた。国立図書館では、幅広いルーツ調査資料のポータルの役割を果たしながら、自館が所蔵している写真・映像・日記など様々な種類の資料を利用に供していた。

(2) 博物館について

今回訪問した EPIC アイルランド移民博物館、及びスコットランド国立博物館での移民に関する展示では、いずれの全体の通史の中で、移民の歴史的背景や影響について紹介している。移民を知らない世代にとっても視覚的に理解・関心を深められるデジタル技術を活用した展示などが見られた。一方で移民地や世界へ影響を与えた成功事例に焦点が当てられる傾向が強くより多様な個人の経験から移民について考えさせるような工夫が必要ではないかと思われる。例えば、移民者やその家族にとって移民することが効果的（好意的）な影響だっただけでなく、植民地形成の動きの中で人々が移動していったことは、移民先の人々への影響があったことは容易に想像できる。また、社会的な地位を得た移民者やその子弟（有名なスポーツ選手、音楽家、政治家等）以外にも人々の移民の経験から学ぶことは多いにある。大

きな歴史の流れの中でこぼれ落ちる人々を含め、人々が移動する中で生じる影響の両側面について考えられる内容とする工夫が必要となるだろう。

また現在、アイルランドにおいては移民送り出しから現在は受け入れも多く様々な国や地域の人々がアイルランド国内に居住しているということに触れ、今後の移民への対応に繋げる形で締めくくられる内容となっていた。現在の「移動する人々」の置かれる社会的磁場を見つめ、博物館（及び図書館）が現在のあり様を問い直す機会を生み出す装置となることが重要ではないだろうか。それは展示に留まるのではなく、1つの方向性として国内に居住している外国籍の方々との共生、その方々の社会的包摂を考える文脈の中で博物館や図書館などルーツ調査を行う機関が汎用的に活用されることができないかと考える。それは例えば、職員であったり居場所であったり、イベントであったり、外国籍の人々が存在することに触れられる（接触できる）機会の創出である。博物館や図書館にある資料の価値や意義が検討され、それらを踏まえた展示や資料の公開がなされることにより、それらを見た（向き合った）人々が「移動する人々」が置かれる社会的磁場に向き合うことにつながるのではないだろうかと思われる。

(3) ジネオロジストについて

今回の調査を踏まえてジネオロジストについて総括すると、専門家としてのジネオロジストは、協会による認定制度があり、その会員として、主に協会のホームページを通して依頼者から個別に依頼を受けている。ボランティアと異なり有償である。

ジネオロジストの仕事は、先祖に関する調査に基づいてレポートを作成し、依頼者にフィードバックすることである。そのために次のようなスキルを必要とする。

- ① 歴史的背景に関する知識
- ② データベース他、古文書等の資料や記録を読み解くスキル
- ③ 諸情報を整理し、依頼者の求める情報を明らかにする能力
- ④ 以上のスキルを駆使して、家族の系譜を紡ぐことができる力

さらに、専門家としての知識や経験によって複数の同性同名者から祖先を特定するなど、専門家でなければ判断することが困難な点も含んでいる。

今回、聞き取りに協力いただいた全てのジネオロジストが、仕事のやりがいについて「他者の役に立つこと」と述べており、この姿勢が、さまざまなスキルに加えて重要な点だと思われた。

2. 今後について

アイルランドやスコットランドと日本では、個人情報の取り扱いやデジタル公開などの制度について、日本と大きな相違がみられた。アイルランドやスコットランドでは、主要な資料がオンラインで検索・閲覧が可能となっていた。また、海外からのルーツ調査希望者は、同じ英語圏からの利用がほとんどで、翻訳・通訳を介さずに直接

調査が可能である。一方日本では、戸籍法などにより委任のない第三者の戸籍謄本等の取得は不可能であり、さらに日本語資料へのアクセスが難しい海外日系人とは状況が大きく異なっている。

しかしながら、日本においても国立国会図書館や国立公文書を中心にデジタル化が進んでいる。地域資料などの所蔵する地域の図書館や公文書館では積極的なデジタル化や利用者サービスを充実が期待される。すでにオンラインで利用可能なデータベースやデジタルコレクションなどを含めたルーツ調査ガイド、さらに地域資料の調べ方案内（パスファインダー）などの作成及び多言語化などは、地域住民及び海外のルーツツーリスト双方に有益である。加えて、移民関係資料所蔵施設や展示施設等が連携し、所蔵資料や利活用の情報、課題など情報共有を図るため、ネットワークの形成と交流を行うことが肝要である。

(1) 沖縄県の場合

沖縄県立図書館をはじめ、市町村にある地域史、交流協会や関係団体等、ルーツ探しを受け入れている機関が存在する。それぞれが対応の中で協力することはあるが、対応方法や資料の活用等の情報を交換するような場を形成が求められる。成功事例のほか、うまく行かなかった事例も含めて共有し、記録として残していくことで今後の参考にもなりうるし、情報交換する中でルーツ調査のノウハウも含めた情報が共有されることが、ジネオロジストのような専門人材育成の機会にもなり得るのではないかと考える。

シンポジウムでも出たように、行政書士等他にもルーツ調査で関係しそうなアクターやルーツ・ツーリズムを担っている機関（及び人々）の情報収集は継続して必要と考えられるが、すでに関係している機関、有志からネットワーク形成を始められるだろう。

沖縄県では、世界ウチナアンチュセンター（仮称）の設立案もある。その機能等が今後検討されていく中、沖縄県立図書館、世界ウチナアンチュセンター、各市町村の地域史、関係団体等との連携のあり方を模索していくことができないだろうか。

(2) 和歌山県の場合

先祖調査に関して、今回の調査で得た知見は非常に興味深いものであったが、個人情報取り扱いに関する点では日本とは大きく異なり、即座にダブリンやエディンバラの例を手本とすることはできない。しかし、専門的な立場でルーツ探しを引き受けているジネオロジストに類似した役割を担える人材の育成という点では、シンポジウムで「日本版ジネオロジスト」という言葉で示されたように、これまで個別に対応してきた公的機関あるいは民間団体の人々が協力することで、その役割を果たしうる潜在的な可能性が十分にあるのではないかと考える。そのためには、和歌山県内の各機関・団体が一層連携を強化し、それぞれの知見を持ち寄ることが必要であろう。

本調査の報告内容の共有はいうまでもなく、個人情報保護の観点も配慮しつつ、沖縄および和歌山の各機関・団体が共に、これから何ができるのかを具体的に検討していける機会を創出し継続していくことにより、互いに学びつつ、それぞれの県の特徴にあった方法で、先祖探しやルーツ・ツアーへと展開していけるのではないかな。

V. シンポジウムの開催

1. 日時：2024年12月20日（金）午後2時～午後4時

2. タイトル：「ルーツ調査におけるアーカイブスの機能と専門家の役割
～アイルランド・スコットランドの先進事例調査から～」

3. 次第：

- (1) 趣旨説明
- (2) 発表① ルーツ調査におけるアーカイブスの役割
沖縄県立図書館 資料・情報班 主査 原 裕昭
- (3) 発表② ルーツ調査専門機関と博物館
沖縄キリスト教学院大学 非常勤講師 金城 さつき
- (4) 発表③ ルーツ調査専門家（ジネオロジスト）の役割と意義
和歌山大学観光学部 教授／紀州経済史文化史研究所 所員 東 悦子
- (5) コメント：京都外国語大学 国際貢献学部 教授 河上 幸子
- (6) 質疑応答

4. 形式：Zoom Webinar

5. 主催：和歌山移民研究を軸とした国際交流事業実行委員会

企画・運営：沖縄県立図書館

6. 参加者：76名（申込者：103名）

7. 動画公開（英語字幕あり）

沖縄県立図書館 YouTube チャンネル内

オンラインシンポジウム「ルーツ調査におけるアーカイブスの機能と専門家の役割
～アイルランド・スコットランドの先進事例調査から～」

https://www.youtube.com/watch?v=Q7rHLv_RXII&t=160s

VI. 謝辞・参考文献

謝辞

ダブリン及びエディンバラの各機関の皆さま並びにジネオロジストの皆さまに貴重な面談の時間をいただき、多くのことを学ぶことができました。記してお礼申し上げます。

アイルランド・ダブリン

National Library of Ireland	Ms. Gráinne MacLochlainn, Mr. Steven Skeldon, Ms. Sandra McDermott
National Archives of Ireland	Ms. Elizabeth McEvoy
Genealogists	Mr. Aiden Feerick, Mr. Paul Gorry

イギリス・エジンバラ

Scottish Council on Archives	Dr Robert Wright, Ms. Audrey Wilson
National Records of Scotland	Ms. Jessica Evershed, Ms. Veronica Schreuder, Ms. Saho Arakawa
National Library of Scotland	Dr Chris Cassells
Edinburgh City Library	Mr. Iain Duffus
Genealogists	Ms. Lorna Kinnaird, Mr. John McGee

参考文献

- Dr. Ancien, Delphine, Prof. Mark Boyle and Prof. Rob Kitchin (2009). *THE SCOTTISH DIASPORA AND DIASPORA STRATEGY: INSIGHTS AND LESSONS FROM IRELAND* Scottish Government Social Research
- 藤川, 隆夫 (2016) . 「『南の虹ルーシー』 から移民博物館へー2 世紀にわたるオーストラリアへの移民の構造と変遷」 『立命館言語文化研究 27 巻 2・3 合併号』 立命館大学国際言語文化研究所
- Gorry, Paul (2018). *CREDENTIALS FOR GENEALOGISTS: PROOF OF THE PROFESSIONAL* 2nd Edition, Gorry Research, Galtinglass, Ireland.
- International Organization for Migration. (2012). Developing a Road Map for Engaging Diasporas in Development.
- 河上, 幸子 (2023). 「移民と観光：和歌山県アメリカ村とルーツ・ツーリズム」 『『東アジアの海域における移民と社会』 p.361-384.
- 喜多, 祐子・山口, 覚 (2008) . 「現代スコットランド人の先祖調査ブームー調査手法の発展と系図学的想像力ー」 『人文地理』 60 (1) 人文地理学会 p.21-40
- 山口, 覚・喜多, 祐子 (2014) 「先祖との絆を創りだすー日本における先祖調査の展開ー」 『関西学院大学先端社会研究所紀要』 11 号 p.11-26
- 山口, 覚 (2017). 「スコットランド系ディアスポラとルーツ・ツーリズム」 『人文論究』 67 巻 1 号, 19-42.
- 関西学院大学リポジトリ <https://kwansei.repo.nii.ac.jp/records/25794> (2024/09/17)
- 渡辺, 幸倫 (2019) . 『多文化社会の社会教育 公民館・図書館・博物館がつくる「安心の居場所」』 明石書店